

書評

Journal of Occupational Science (2021) 第28巻 第1号

第28巻第1号を概観すると、作業的不公正、障害者の権利や差別、移民の経験について論じた計14編が掲載されている。本書評では、以下にそれらの概要を順に紹介する。

Wallcookら(2021)は、作業にとって、日常の屋外生活と様々な場所へのアクセスは重要であるが、屋外のテクノロジーが人によっては作業的不公正を招き得ると問題を提起する。その上で、屋外生活のテクノロジーと、認知症のある高齢者とない高齢者が出掛ける場所の数における関連性を検討した。Sorianoら(2021)は、過疎化の影響を、大都市圏から離れた地方に住む人々の作業権の侵害という観点から明らかにした。作業科学の立場から、作業的不公正に対処し、平等な作業権を実現するための様々な規模の行動を論じる。Fahyら(2021)は、自閉症児の屋外遊びの場を理解するために、屋外遊びの作業と環境を調査した。これは子どもたちの遊ぶ権利に着目し、屋外での遊びが減少していることを懸念して行われたもので、人がなることでなく、あることに焦点を当て、欠陥モデルを退け、自由に遊ぶための権利に基づく作業的公正の視点を支持することを主張している。

次に、Jónasdóttirら(2021)は、運動障害のある人の社会参加を実現するためには、日常生活の移動には多様な障壁があるので、移動手段に修正が必要であると述べる。さらに、障害者のアクセシビリティと移動サービスを改善するための施策を提言する。Gappmayer(2021)は、非障害者優先主義と障害者差別を探索し、能力があるという社会規範がどのように作業に影響し、人間間の差別を生んでいるのかを検証する。

さらに、Ekstamらは(2021)は、多くのヨーロッパ諸国で健康と仕事を含む移民の統合が重要な課題であるとしている。そして、自然に基づく職業リハビリテーションプログラムがどのように健康感に影響し、移民の日常生活に統合されるかを調査している。

最後にGalvaan(2021)の論文を紹介する。作業科学を意味あるものとして位置づけるためには、知識生成の過程における心地悪さの経験、開示、解体が必要であると述べている。それによって、人間の作業を理解し実施する可能性を生み出すとき、破壊が生成的なものになると論じている。社会生活を営む上で私たちの作業は当たり前のように性別や年齢、地域、政治などの影響を受けている。この当たり前に疑問をもち、批判的に議論し、“生成的破壊”を行っているのが作業科学であり、本号からそれを学ぶことができる。

鹿田将隆(常葉大学)

文献(引用順)

Wallcook, S., Nygard, L., Kottorp, A. & Gaber, S. (2021) Kaleidoscopic associations between life outside home and the technological environment that shape occupational injustice as revealed through cross-sectional statistical modelling. *Journal of Occupational Science*, 28(1),

42-58.

Laborda Soriano, A. A., Aliaga, A. C., & Vidal-Sánchez, M. I. (2021) Depopulation in Spain and violation of occupational rights. *Journal of Occupational Science*, 28(1), 71-80.

Fahy, S., Delicâte, N., & Lynch, H. (2021) Now, being, occupational: Outdoor play and children with autism. *Journal of Occupational Science*, 28(1), 71-80.

Jónasdóttir, S. K., Egilson, S. P., & Polgar, J. (2021) Structural factors affecting community mobility for people with mobility impairments in Iceland: A human rights and occupational perspective. *Journal of Occupational Science*, 28(1), 59-70.

Gappmayer, G (2021) Disentangling disablism and ableism: The social norm of being able and its influence on social interactions with people with intellectual disabilities. *Journal of Occupational Science*, 28(1), 102-113.

Ekstam, L., Pálsdóttir, A. M., & Asaba, E. (2021) Migrants' experiences of a nature-based vocational rehabilitation program in relation to place, occupation, health and everyday life. *Journal of Occupational Science*, 28(1), 144-158.

Galvaan, R. (2021) Generative disruption through occupational science: Enacting possibilities for deep human connection. *Journal of Occupational Science*, 28(1), 6-18.

書評

Journal of Occupational Science(2021) 第28巻 2号

2021年発行のJOS28巻2号は、学問分野としての作業科学の創設30周年記念の特別号である。2019年にUSCで開催された作業科学シンポジウムで発表された論文と、シンポジウムのテーマに関連した論文から構成される。編者であるRebecca M. Aldrichによると、作業の継続的な発展を考える意味（重要性）について考察する。本号は作業科学の起源と発展を振り返り、学問としての統一までの基盤形成、概念形成と発展、教育における作業科学カリキュラム開発までの歴史を振り返り、今後を考えることをテーマにした9編の論文で構成されている。今回、その中の一部を紹介したい。

Calhoun (2020)は、学問としての作業科学の起源を振り返ることは国際的な問題に取り組み、社会的に敏感な学問としての将来を描くうえで重要であると主張する。本論文は、歴史的発展について考察し、作業科学の歴史的貢献を支える4つの信条が明らかにし、学問の発展と社会貢献に対して提言する。

Lawlor (2021)は、作業科学のルーツはUSC博士課程と言われるが、それ以前の作業の研究や作業療法分野の哲学、プラグマティズムの基盤に形成されてきたと述べる。ここでは、作業科学における重要な転機を特定し、例を挙げながら概念化と枠組みを提案する。

Pereira (2021)は、作業科学、特に作業的公正の議論におけるPeters (2020)の「機会」

の概念化に関するスコーピング・レビューについて論評を展開した。ここでは、3点に焦点を当てており、第1はキーワードの定義が明確でないこと、第2に機会の概念は能力と同義とされていたこと、第3に機会の概念化と実現の両者を作業科学の分野でいかに拡張できるかを示す。

Payneら(2021)は、USCの作業科学マイナープログラムを例に挙げ、このプログラムの創設が作業科学を発展させ、次世代の研究者、臨床家、当事者へと前進させる方法の一つとなることを明らかにした。Zemkeの紹介を詳しく述べ、学生対象の作業科学カリキュラム開発指針の原則を探求する。

以上、4つの論文を挙げたが、他にも環境からのdoingへの影響や発展中である作業の概念化を概観することなど、作業科学の歴史から今後の発展を考える内容が盛り込まれている。長く作業科学に慣れ親しんできた研究者や臨床家だけでなく、作業科学を学び始めた初学者にもぜひ目を通していただきたい。歴史を振り返ることや知ること、それぞれが学んだ上で知識を活かし、今後の作業科学のますますの発展を期待したい。

馬場博規(磐田市立総合病院), 小田原悦子(フリーランス)

文献(引用順)

Allison D. Calhoun (2020). The development and future of occupational science: A budding occupational scientist's reflections and assertions about the discipline. *Journal of Occupational Science*.28 (2), 193-207

Mary C. Lawlor. Pages (2021). An untold story: A unifying narrative of the discipline of occupational science. *Journal of Occupational Science*.28 (2), 208-220

Liesl Peters & Roshan Galvaanb (2020). A scoping review exploring 'opportunity' in occupational science: Possibilities for conceptual development. *Journal of Occupational Science*.28 (2), 249-267

Kristy Payne & Kate Crowley(2021).Developing an occupational science curriculum for undergraduate students. *Journal of Occupational Science*, 28 (2), 308-313.

書評

Journal of Occupational Science(2021) 第28巻, 第3号

編集者Hocking(2021)によると、28巻3号は作業科学に深く関わる「つながりと地域社会」を議論した2部構成である。第一部は社会政治レベルあるいは個人レベルで地域社会とのつながりを扱う。第2部は、編集委員会による人種差別への反対誓約を各言語へ翻訳したものである。本書評では、計5編を紹介する。

Masson(2021)は、学校給食における社会参加の複雑さを子供の視点から調査した。この

調査は、エスノグラフィーを用い、社会参加がどのように起こったか捉えた。給食室において好ましくない人や不測の状況が起こると、チャイルドコンサルタントが介入し、子供たちが一緒に社会的な作業に従事し、食べて遊ぶように、彼らの関係を維持し補強していた。

Lewisら(2021)は、高齢者の社会的参加の経験をより明確な作業的公正の立場から研究した。この研究は政策立案に作業的視点を取り入れることを促進することを目指し分析を行った。明らかになった社会参加への潜在的な促進要因は、コミュニティ参加を支援する個人の存在、アクセスしやすい環境、ニーズに合わせたプログラムであった。反対に、阻害要因は、文化的価値観、エイジズム（年齢による偏見や差別）に基づいた政策であった。

Dubucら(2021)は重度外傷性脳損傷者の地域社会への統合がどのように妨げられるかを調査研究した。詳細なインタビューの分析から、研究参加者が経験している地域社会の統合は、必要なタスクの高さ、社会環境から得られる支援の質、資源のアクセスのしやすさ、作業への関心度に応じて変化することがわかった。また、この状況において意味ある作業の従事を減らし、自分の作業と個人的な期待と環境に適応する必要に迫られていた。この研究の結果はより長期的なコミュニティサービスの必要性を示唆している。

Citterら(2021)は、新生児集中治療室（NICU）における母親の経験を、より個人的なレベルで研究するためにナラティブレビューを行った。母親役割のための奮闘、精神的な準備不足、わが子とのつながりの探求、以上の母親の経験のテーマが見つかった。NICUの環境と精神的な苦勞により母親の作業、例えば授乳、が制限されるという作業的視点が示唆された。このレビューで明らかになった作業的視点は、女性が母親になることと新しい状況への適応に関わる作業に従事することを援助するであろう。

最後に、Castro de Jongら(2021)は、共同作業を通じたつながりを中心に、作業療法プログラムと他者支援を目的とする音楽プログラムとの協働を研究した。本論文はJOSによる学びに貢献する。つまり、作業療法学生が協同作業を作り出すことの複雑さを経験し、個人としてまた将来の健康の専門家として、自身を尊ぶようになる機会を提供する。

高木 信也（絃仁病院）

小田原 悦子（フリーランス）

文献（引用順）

Mason, A. E. (2021). Children's perspectives on lunchtime practices: Connecting with others. *Journal of Occupational Science*, 28 (3) 319-331.

Lewis, E. & Lemieux, V. (2021). Social participation of seniors: Applying the Framework of Occupational Justice for healthy ageing and a new approach to policymaking. *Journal of Occupational Science*, 28 (3) 332-348.

- Dubuc, É., Gagnon-Roy, M., Couture, M., & Bottari, C. (2021). Integration in the community following a severe traumatic brain injury: A qualitative study exploring the presence of occupational rights violations over a lifetime experience. *Journal of Occupational Science*, 28 (3) 349-362.
- Citter, O. & Ghanouni, P. (2020). Becoming a mother in the neonatal intensive care unit: A narrative review. *Journal of Occupational Science*, 28 (3) 363-373.
- Castro de Jong, D., Pike, G., West, S., Valerius, H., Kay, A. & Ellis, S. (2021). Shared music, shared occupation: Embedding music as a socio-altruistic collective- and co-occupation in occupational therapy education. *Journal of Occupational Science*, 28 (3) 374-387.

書評

Journal of Occupational Science(2021) 第28巻 4号

編集者の Hocking (2021)は 2021 年発行の JOS28 巻4号のテーマとして「自己」をあげている。本編ではアイデンティティの形成や保持、取り戻す過程についてなど、7編の論文が掲載されている。

まず始めに Maersk(2021)はアイデンティティ形成の過程に着目し、精神力動論、人格心理学、ナラティブ理論の統合解釈を行っている。その過程では、自己の連続性の保持が重要であり、作業は経験の連続性をもたらすことからアイデンティティ形成の源であると論じている。次に Dailyら(2021)は実質的なものづくりと自己の関係性について追求している。表面的には類似している模型製作とビジュアルアートという種目のどちらを趣味としている人々を対象とした混合的デザイン研究で、それぞれの作業の特質がそれに従事する人のアイデンティティ形成の一因を担っていることを示した。さらに Ryan(2021)らは教育の追求を通じた自己形成の過程について考察している。カレッジ進学促進プログラムに参加した貧困地域の青少年たちは、自分達の置かれた経済、教育における制約を認識しつつも、その状況の中で主体性を持って doing, being, belonging を通じた自己実現を行なっていることが示されていた。

一方で、次の3編は機能低下とも言える過程の中における自己実現やアイデンティティに迫っている。まず Kielsgaard(2021)らの論文では人が過去を振り返ることで自己の継続性が保つ様子が描かれている。彼らは認知症タウンにおける参加観察とナラティブを通してそこに暮らす高齢者たちが作業を通して意味を作る過程について分析した。認知症高齢者は、語りを通して意味のある余暇や職業的役割という過去を演じる。そのような意味ある従事はその人を自己・他者・場所に繋ぐことが示唆されたが、その過程は他者により支援される共同制作に依存している。Jakobsenら(2021)は機能低下の過程をたどる両親を支える成人した子どもの家族作業に着目した。子どもが経験する家族作業を冰山に例え、常に変化

し続ける「一緒に行く」、「お互いに行く」などの見える部分に「頼まれずにやる雰囲気」や「備えを行う」など見えない部分があることを示した。Jakobsenら(2021)は作業を通しての自己実現の視点から、他者の自己認識を傷つけない配慮が必要なことを指摘している。Betrand(2021)らは逆に作業を中断させられる経験がアイデンティティに与える影響に着目している。高齢に伴い運転を止めることはその個人と社会的ネットワークの両方に影響を及ぼす。その過程は直線的ではなく、日常への適応には作業やルーチンの代替的な再構成が必要であった。しかしそこには大切な作業であった運転という作業を失っても、自己の継続性を見出すことは可能であることが伺える。

最後に Delaisseら(2021)は視点を変えて、Lefebvreの「空間の生産」理論を用いて、作業は空間が構想され、知覚され、生きられる過程の中で重要な役割を担っていることを述べている。作業は本質的に空間的であり、また空間を生産する。このような空間の動的な概念化は、空間／場所の二項対立に挑戦するものであり、作業科学による空間の理論への貢献であると言える。

川端佐代子 (University of North Carolina at Chapel Hill)

文献 (引用順)

Hocking, C. (2021). Editorial. *Journal of Occupational Science*, 28(4), 465-468.

Maersk, J. L. (2021). Becoming a self through occupation: Occupation as a source of self-continuity in identity formation. *Journal of Occupational Science*.28 (4), 469-478.

Daily, L. Z., DiLima, R., Streett, A., & Healy, K. (2021). The relationship of leisure occupation, personality, and well-being: A comparison of model builders and visual artist. *Journal of Occupational Science*, 28 (4), 472-495.

Ryan, S. J., Flank, S., Vesagas, T. & Tolentino, E. (2021). Occupational ideation and participation among middle school students in a college-going culture program, *Journal of Occupational Science*, 28 (4), 496-509.

Kielsgaard, K., Horghagen, S., Nielsen, D., & Kristensen, H. K. (2021). Moments of meaning: Enacted narratives of occupational engagement within a dementia town. *Journal of Occupational Science*, 28(4), 510-524.

Jakobsen, F. A. (2021). Adult children's experiences of family occupations following ageing parents' functional decline. *Journal of Occupational Science*, 28 (4), 525-536.

Jonsson, H., Margot-Cattin, I., & Vrkljan, B. (2021). A narrative analysis of the transition from driving to driving cessation in later life: Implications from an occupational lens. *Journal of Occupational Science*, 28 (4), 537-549.

Delaisse, A., Huot, S., & Veronis, L. (2021). Conceptualizing the role of occupation in the production of space. *Journal of Occupational Science*, 28 (4), 550-556.